

# The Chinese Udānavarga

——大窪氏の書評に答える——

Charles Willemen

Ch. Willemen: The Chinese Udānavarga — A Collection of Important Odes of the Law —, Bruxelles 1978. に対する大窪氏の書評『佛教学セミナー』第31号(1980, pp. 76-85)に答える。氏の翻訳に関する所見(IV, pp. 78-84)にこづつと概して氏は『法集要頌経』が中国語のテキストであり、中国語自身の語法によって読まれ、理解されるものであるということ、を忘れていられるように思われる。中国語のテキストを扱う場合には、印度のテキストは第二次的資料として使用されるものであって、唯一の真実としてみなすべきではない。中国語(佛典)は印度語のひとつの翻訳である。この『法集要頌経』の場合には特に逐語訳ではない。Udānavargaの中国語訳は、多くの箇所では梵語のものとは異っているために、梵語の平行テキストを用いて翻訳する場合には注意深くしなければならない。たとえ中国語の平行テキスト(『出曜経』)であっても確実な証明とはならず、かならずしも従う必要のない、単なる示唆にすぎない。私は詩節に対し関連する平行テキストをノートの中に明記しており、大窪氏はもはや平行テキストを探する必要はなく、私のノ

ートの中にすんで見出している。

別の重要な点は、Udānavargaは深遠な学問的なものではなくて、一般的なテキストであるという点である。このことは、幾つかの翻訳可能な意味の中から、一つを選択する際にせひとも心に留めておかねばならぬ。

## 〔詳細〕

chp. I, B.: 「広説」の「広」は単に梵語の接字 vi- に相当する。すなわちの章の中にある頌を説く、という意味である。Ch. 「乃至広説」peyāla, chp. XXIV.

chp. I, 16: 「去」にこづつ、この漢字は『法句経』・『法集要頌経』・『出曜経』には「聽」にこづつ、Dhammapada には pañīnam にこづつて見受けられる。Udānavarga の関連詩節は I, 17 d. āyūh. pāpavate nirāṃ である。この重要な単語は nirāṃ と pañīnam であり、niryūh. ではない。更に、この比喻は牛飼いが牛の群れを世話しながら行く(行)ように、人は命を養いつつ行く(去)という意味である。「去」に対する“to die”は必ずしも必要でなく。

chp. I, 23: 「漏」āsrava の訳“bias”は Nyāntioka の訳語である。Ch. Buddhist Dictionary, Colombo 1950, p. 19 s. v. āsava influx, bias.

chp. II, 1: 「欲意」kama の意味の「意」はありえるが、必然性はない。

chp. II, 15: c はたしかに翻訳から脱落している。

chp. II, 17: こころは「色」は“beauty”. 即ち、女性の美、

美しい婦人であり、彼女たちは実に愛欲、貪、kāma の対象である。この美はまさに無常である。又、この經典が一般的なテキストであって、一般信者を対象としたものであることに注意することが重要である。「色」は様々な意味をもっているため、当然、異った翻訳が可能である。したがって適切な意味を見つけ、翻訳が読みやすいか、単語でないかを調べるべきである。原則：一語に対して一つの訳語は、しばしば Abhidharma に適用されるが、Udanavarga は Abhidharma とは大分違ったものである。私はもし必要とあればノートの中に相当する梵語を記すべきだ。(chp. V, 10, XX, 1, XXXII, 11, XXII, 14, XXXI, 11, XXII, 5)

chp. IV, 9: 私は提案をれた翻訳に同意する。

chp. IV, 15: 翻訳されるべきものは『法集要頌経』であって『出曜経』ではない、ということをお忘れてはならない。ノートの中で私の翻訳を説明してある。「本情」は“these circumstances”を意味する。「本」は「この」(前の頌を受けつづける)を意味する。

chp. IV, 39: 毘尼 vinaya 法(dharma)は dhama-vinaya, dhama vinaya とはならず。中国語ではこの合成語が dvandva である必要はない。

chp. V, 7: 私は可能と思われる訂正を受け入れたいと思う。  
chp. V, 9: 私は「処」に対して“to strive”という意味が

あるという証拠を見つけたことがない。「処」は梵語の locative case を示すであろう。

chp. V, 10: より良い読みを私はノートの中で指摘しておいた。ノートは大窪氏の誤解をとりのぞいてくれる。ノートをよく読んだ人はこれらをエラーとは見なさないであろう。同様のごとは VIII, 5, XIII, 6, XXVIII, 29, XXX, 21, XXXI, 35 にもいえる。大窪氏はこれらの箇所を私のノートの中に見出した。現行のテキストを訂正することは翻訳の仕事ではない。テキストを採用し、翻訳し、一切のテキストに関する情報はノートに入れるべきである、と考える。

chp. X, 3 & 5: 『出曜経』(信為)や Udanavarga は私の訳した「信者」が誤りであると証明しなす。

chp. XXI, 3: 「如来」に替わって「来」がおそらく動詞であろうと理解するのは困難ではない。中国語(漢文)の知識がこれを明らかにする。

chp. XXIX, 34 & 35: もちろん「外」は「外面的な」という意味があるが、このこの場合になぜそうとらなければいけないのでしょうか? Udanavarga のように一般的かつ単純なテキストの中では「外」は(佛教徒を意味する「内」とは反対に)異教徒(=外道)を意味する。

chp. XXXI, 13 & 14: 平行テキストはノートの中にある。しかし、ここでは『法集要頌経』が翻訳されねばならない。梵語やパリーのテキストがではない。中国語として「是心使」は“(mind)……has influence on (everything)”とは読めない。

もちろん、梵語を中国語の中に投入することはできるが——私はよくそうする——しかし中国語の語法にありそうもない拡大は決してしない。

chp. XXXII. 22: 質問・何故大窪氏はpを分離した文として訳すのか? どのように「正使」をoの中に訳すか?

chp. XXXIII. 33: 神々・人間・ガンダルヴァが「識不知」「cannot know」の主語であるという『出曜経』を基礎にすることに同意します(ノートの言及を参照)。しかし、abとcの中の主語を変える理由はないようにみえる。abでは、*he cannot know*。cでは、*he can know*。bの語の順序は

[質問]

大窪氏は中国語の背後にある梵語を過大に強調しておきながら、『法集要頌経』に私がつけた詩節の番号にいつも同意しているようにおもわれるのは何故か? 中国語の詩節は多くの箇所て印度のテキストとは一致していないのである。又、何故、私の本の INTRODUCTION についで論評しないのか? INTRODUCTION の中には、例えば、有部の佛教徒の聖典に於ける出曜 Udana の位置のように、論議されうるいくつかの箇所があるのである。

以上。